



The Kyoto University Library Bulletin

静脩

1974年 10月

Vol. 11, No. 1

ご 挨拶

附属図書館長 林 良 平

しばらく、この静脩の出版がおくれていた。さきの館長堀江保蔵教授が学内の図書ないし図書館に関するコミュニケーション、とりわけ全学に広く分散している図書室の職員の連絡業務・研究の活発化を願われて、創始されたことは極めて貴重なことであり、それなりに今日まで、全学的役割を果たしてきたと考えている。

わたくしが、昨年春、はからずも附属図書館長に選ばれて以来、残念ながら、わたくしなりの気持を、誌上をかりてご挨拶申し上げることが延引してしまっているが、創始以来の方針が今後も踏襲せられるべきことはいうまでもない。ただ発刊以来十年近く経た今日、大学図書・図書館の問題は、それなりに量・質ともに変遷があり、また、われわれのなすべきことも、これに対応して変化のあるべきことは否定できない。

この十年の歩みを振り返れば、何よりもその間の図書あるいはその他の方法を通じての情報量の飛躍的増大が指摘されねばならない。またそのため、これを入手する方法に従前とは異なった一段の努力が必要のみならず、その手段にも質的にも異なった方策を考え出

さねばならなくなったことが痛感される。さらに、これらの購入、設備運営に対する費用も飛躍的に増大している。今日各研究者はこの情報の収集、整理、伝達に、研究者固有の職分たる思索の時間を大きく割かねばならなくなっている。これに対応する図書系職員も、格段の努力のみならず能力の増大を要求されている。ただでさえ増大する事務量に加えて、新しい運営のための職員そのものの研究への時間が要求されている。しかも、予算の絶対的不足、能率化のための機械化への要望とそれに対する対応、山積する諸問題は、個々にみれば、小さな問題のようにみえるが、それを未解決のまま放置すれば、やがて大学を襲う基本的かつ至難な一大問題となつてわれわれを苦しめるおそれすらないとはいえない。

この機会に、逐次大学図書館に関する諸問題を図書館・図書室のがわからず、また研究者のがわからず、相互に問題提起し、本誌をその対話の場としたい。それぞれについては、わたくしもまた折にふれて今後皆様に訴えていきたいと考えている。この機会にわたしの卒直な気持を申し述べてご挨拶に代えさせていただきます。